

柏市堂堀原遺跡・荒句遺跡

— 県単道路改良（幹線道路網整備）委託（大島田埋蔵文化財調査）報告書 —

平成18年11月

千葉県県土整備部
財団法人 千葉県教育振興財団

かしわ どうほりはら あらぐ
柏市堂堀原遺跡・荒句遺跡

— 県単道路改良（幹線道路網整備）委託（大島田埋蔵文化財調査）報告書 —



序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その結果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第561集として、千葉県県土整備部の幹線道路網整備事業に伴って実施した柏市堂塚原遺跡・荒句遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代の石器や縄文時代の陥穴、奈良・平安時代の住居跡が検出されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成18年11月

財団法人 千葉県教育振興財団

理事長 岡 野 孝 之

凡　　例

- 1 本書は、県単道路改良（幹線道路網整備）に伴う柏市大島田地区における埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、以下の2遺跡である。
 - 堂堀原遺跡 千葉県柏市大井字堂堀原1897-9ほか（遺跡コード305-011）
 - 荒句遺跡 千葉県柏市五條谷字上谷ツ台39-7ほか（遺跡コード305-012）
- 3 発掘調査から報告書に至る業務は、千葉県県立整備部東葛飾整備センターの委託を受け、財團法人千葉県教育振興財团が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の経緯及び担当者は、第1章に記した。
- 5 本書の執筆・編集は大内千年が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育厅教育振興部文化財課、柏市教育員会、沼南町教育員会（発掘調査時）の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、以下のとおりである。
 - 第3図 國土地理院発行 1/25,000地形図「取手」(NI-54-19-13-4)
1/25,000地形図「白井」(NI-54-19-14-3)
 - 第4図 沼南町役場発行 1/2,500沼南町都市計画基本図5・11（平成13年作成）
- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による平成15年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した座標値は、すべて日本測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。
- 10 収録した遺跡は、旧東葛飾郡沼南町に存在し、調査終了後に柏市と沼南町が合併した。調査コードは旧沼南町のものであるが、そのまま使用した。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第2章 堂堀原遺跡	9
第1節 調査の概要	9
第2節 遺構と出土遺物	9
1 旧石器時代	9
2 縄文時代以降	10
第3章 荒句遺跡	14
第1節 調査の概要	14
第2節 遺構と出土遺物	14
第4章 まとめ	16
報告書抄録	
	卷末

挿図目次

第1図 グリッドシステム	2	第7図 SK001・SK002	10
第2図 基本層序	3	第8図 堂堀原遺跡 確認トレンチ中出土遺物	
第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)	1		12
第4図 調査区位置と周辺地形図 (1/3,000)	7	第9図 荒句遺跡 確認トレンチ・遺構配置図	
第5図 堂堀原遺跡 確認トレンチ・遺構配置図			14
	8	第10図 SI001	15
第6図 旧石器時代遺物分布状況・出土石器	9	第11図 荒句遺跡 確認トレンチ中出土遺物	16

図版目次

図版1 堂堀原・荒句遺跡 遺跡周辺地形航空写真	図版3 堂堀原・確認トレンチ中出土遺物 (1/3),
図版2 堂堀原・調査前状況 堂堀原・4F-04土 層断面, 堂堀原・旧石器時代石器出土状 況, 堂堀原・SK001, 堂堀原・SK002, 堂 堀原・8E-04付近土器出土状況, 荒句・ 調査状況, 荒句・SI001	堂堀原・旧石器1 (1/1), 堂堀原・旧石器 2 (4/5), 荒句・出土遺物 (1/2)

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

千葉県海上整備部東葛飾整備センター（IH東葛飾事務所）は、幹線道路網整備の一環として、県道船橋・我孫子線の道路改良を進めてきた。大島田地区の事業区域内には、周知の埋蔵文化財密集地である柏市（旧沼南町）堂塙原遺跡及び荒句遺跡が所在しており⁽¹⁾、これらの埋蔵文化財の取り扱いについて、千葉県教育委員会と協議した結果、記録保存の措置を講ずることになった。

発掘調査及び整理作業は、財団法人千葉県教育振興財團が委託を受けて実施することとなり、発掘調査は平成15年度に実施した。両遺跡とも、確認トレンチを設定して、ほぼソフトローム上面での上層の遺構確認をおこなった。その後、IH石器時代の遺物の存在を確認するため、ソフトローム以下の下層確認調査をおこなった。上層・下層とも遺構・遺物の存在した地点は確認トレンチ・グリッドの周囲を拡張し精査したが、遺構・遺物の広がりはなく、確認調査の範囲内で終了した。

整理作業は平成18年度に実施し、年度内に報告書刊行となった。

発掘調査・整理作業の実施期間・担当職員・内容は以下のとおりである。

平成15年度

（発掘調査）

堂塙原遺跡

期 間	平成15年12月1日から平成16年2月4日
組 織	調査部長 斎木 勝 北部調査事務所長 古内 茂
担 当	北総調査室長 萩 淳一
内 容	上層確認調査 587m ² /6,650m ² 下層確認調査 273m ² 6,650m ²

荒句遺跡

期 間	平成16年2月3日から平成16年2月26日
組 織	調査部長 斎木 勝 北部調査事務所長 古内 茂
担 当	北総調査室長 萩 淳一
内 容	上層確認調査 125m ² /1,190m ² 下層確認調査 48m ² /1,190m ²

平成18年度

（整理作業）

期 間	平成18年6月1日から平成18年7月31日
組 織	調査部長 矢戸三男 北部調査事務所長 古内 茂
担 当	研究員 大内千洋
内 容	水洗・注記～報告書刊行

2 調査・整理の方法

(調査方法)

千葉県教育振興財團では、千葉県教育委員会の指導により、上層については対象面積の約10%、下層については約4%の確認調査をおこない、その結果に基づいて本調査範囲を確定している。堂堀原・荒句遺跡の調査においても、この方式を採用した。上層については、幅約1m～2mのトレンチを調査区内にまんべんなく配し、その内部を概ねソフトローム上面まで掘り下げ、確認面を精査し、遺構確認をおこなった。下層については、堂堀原遺跡では2m×2mの試掘坑を調査区全体に配する通常の方法を採ったが、荒句遺跡では、調査区の制約から、幅約1.5mのトレンチを調査区内に配して、その内部を掘り下げた。

安全上の配慮から深度2mを越えない範囲で、概ねX層まで掘り下げ、旧石器時代遺物の存在を確認した。

前述のように、両遺跡の上層・下層とも、検出された遺構・遺物の広がりが認められず、本調査には移行せず、確認調査の範囲内で終了した。

(グリッドシステム)

調査をおこなうにあたって、公共座標（日本測地系）に基づきグリッドの設定をおこなった。20m×20m方眼を設定し、これを大グリッドとした。大グリッドの呼称は北西を起点に、北から南に1、2、3…とし、西から東へA、B、C…とし、これを組み合わせて使用した。大グリッド内はさらに4m×4mの25区の小グリッドに分割した。小グリッドの呼称は、北西を起点に、西から東へ00～04、北から南へ00～40とした（第1図）。

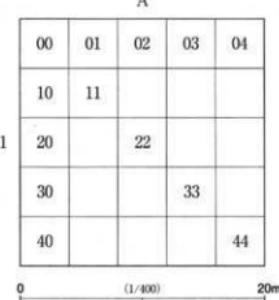
なお、堂堀原遺跡と荒句遺跡では、グリッドシステムは同じであるが、グリッドの起点を変えている。このため、両遺跡のグリッドは、直接つながることをお断りしておく。

(基本層序)

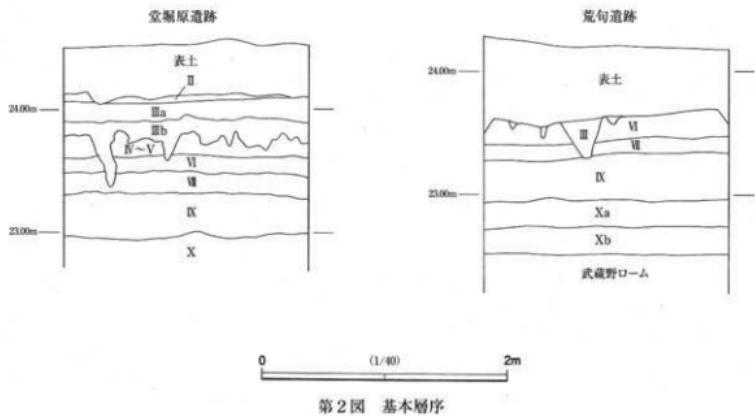
堂堀原・荒句遺跡の基本層序を、第2図に示した。それぞれの断面図を記録した地点は、第2章・第3章を参照して頂きたい。

堂堀原遺跡では、耕作等のためII層以上は明瞭には認識できなかったものの、III層以下は比較的良好に残存していた。特徴的なのは、III層（ソフトローム）が上部（IIIa）と下部（IIIb）に分離されることで、ソフト化する以前のローム層の違いを反映している可能性がある。写真で判断する限りは、ソフトロームの下部のほうがやや明るい色調のように見える。III層直下の土層は、調査時にはIV層～V層と認識され、第1黒色帯に相当するV層は明確には捉えられていない。VI層は始良Tn火山灰（AT）を集中的に含む層で、明褐色で明瞭に認識できた。VII層は第2黒色帯の上部に相当し、ATの拡散が見られた。VIII層は第2黒色帯下部に相当し、黒みが強く比較的明瞭に認識できたが、調査時にはIX層の細分はできなかった。X層はIX層に比べスコリアの含有が減り、容易に識別できたが、細分はできなかった。

荒句遺跡は、耕作による擾乱がひどく、上層の遺構確認にもかなりの支障を来たした。調査区内ではVI層より上部は明瞭には確認できなかった。IX層は比較的明瞭に認識できたものの、細分はできなかった。X層は、上層（a）と下層（b）に細分できた。Xa層に比べ、Xb層のほうがやや色調が暗く、粘性がある。



第1図 グリッドシステム



第2図 基本層序

X層以下は武藏野ロームと調査時に判断したが、色調はそれほど白味を帯びないとの所見がある。

第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡

1 遺跡の位置と周辺の地形

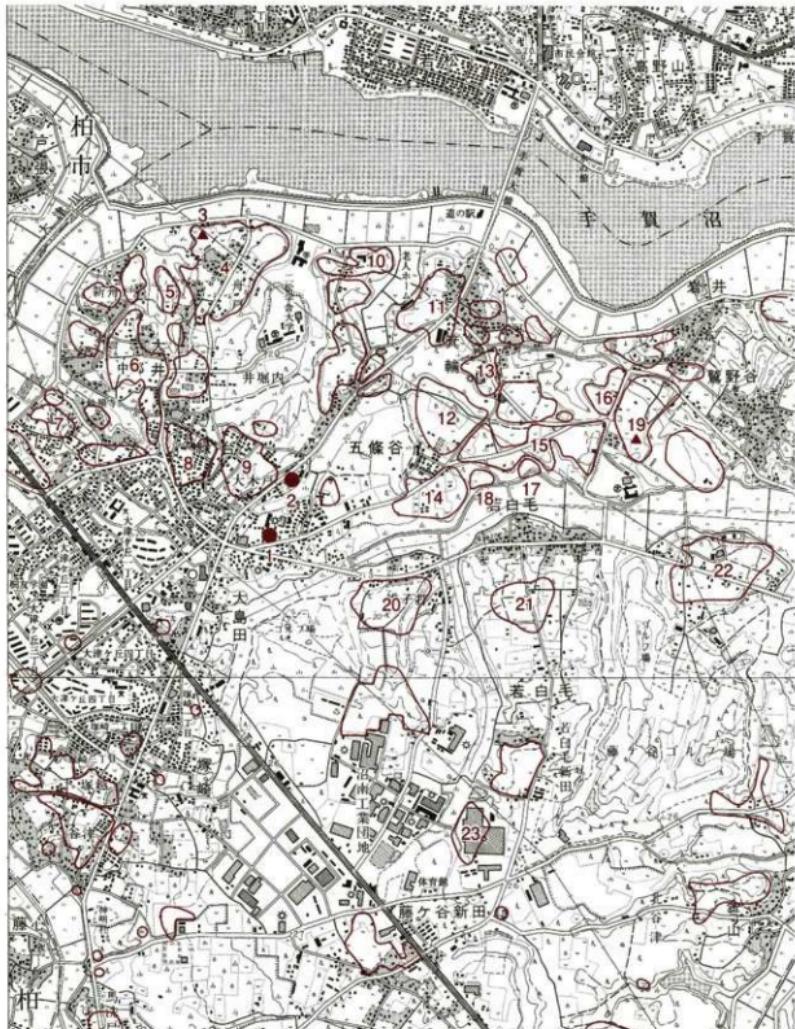
堂堀原遺跡は、柏市大井字堂堀原1897-9ほかに所在する。荒句遺跡は柏市五條谷字上谷ツ台39-7ほかに所在する。両遺跡とも旧東葛飾郡沼南町に所在しており、柏市と沼南町の合併に伴い、住所表記が変更となった。遺跡は、合併後の柏市のほぼ東半分にあたる、旧沼南町の北西部に位置し、国道16号線大島田交差点から北西に約1kmで、柏市役所沼南庁舎（旧沼南町役場）からもほど近い（第3図）。

旧沼南町は、柏という東京近郊の大規模都市に隣接するものの、鉄道駅がなかったせいか、これまでには近郊農村的な雰囲気を色濃く残す地域であった。一方、町域の南部には、千葉県北西部の交通の大動脈である国道16号線が斜行して走り、この幹線を中心とした工業団地などの開発が進められてきた。平成17年4月に西側に隣接する柏市と合併し、旧沼南町域は柏市のほぼ東側半分を占めることとなった。合併で今後開発が加速する可能性もあり、これまで以上に埋蔵文化財の保護が求められることとなろう。

旧沼南町域は、概ね北側を手賀沼、東側～南側を手賀沼が分岐した下手賀沼と共に注ぐ「金山落とし」と呼ばれる河谷により区切られる。西側は、南から北に流れ手賀沼に注ぐ大津川を挟んで、旧柏市域と接する。以上のように旧沼南町域は、湖沼と河川により周囲を囲まれた広大な台地により構成されるが、この広大な台地の中央部を、手賀沼に向かって西から東に注ぐ「染井入り落とし」と呼ばれる河谷が横断し、台地を北側と南側に分断する。

この分断された南側台地の西寄りに、両遺跡は位置している。この南側台地は、主に手賀沼の位置する北側から支谷が多数貫入し、樹枝状の狭い舌状台地が発達する。一方南側に位置する、「染井入り落とし」から北に向かう支谷は少ない。

堂堀原遺跡と荒句遺跡は、手賀大橋の西側付近に開口部をもつ、比較的規模の大きい谷である、五條谷支谷と呼ばれる谷の最奥部に位置する。五條谷支谷最奥部の谷頭付近の南側に堂堀原遺跡が、北側に荒句



- 1 : 堂堀原遺跡、2 : 荒勾遺跡、3 : 大井（船戸）貝塚、4 : 大井遺跡、5 : 東山遺跡、6 : 車の前遺跡、
 7 : 追花遺跡、8 : 六盃内遺跡、9 : 天神向原遺跡、10 : 箕輪城跡、11 : 大久保遺跡、12 : 道堀遺跡、
 13 : 糜遺跡、14 : 道堀原遺跡、15 : 樹方遺跡、16 : 岩井山口遺跡、17 : 松原製鉄遺跡、18 : 仮称「樹方低
 地遺跡」、19 : 岩井貝塚、20 : 猿子打遺跡、21 : 若白毛遺跡、22 : 幸田原遺跡、23 : 金山宮後遺跡

第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡

遺跡が存在する（第4図）。

遺跡の存在する台地の標高は、約24mで、谷部の水田面の標高は約15mである。台地と谷との比高差は約9mで、谷へ向かう斜面は急斜面となっている。

2 周辺の遺跡

第3図に堂堀原遺跡・荒勾遺跡の位置と、周辺の主な遺跡を示した。周辺遺跡の詳細については、千葉県理文化財分布地図^[2]等を参照して頂くこととして、ここでは近年報告された遺跡を中心に簡単に見てみたい。

第3図（1）が堂堀原遺跡、（2）が荒勾遺跡で、五條谷支谷の左岸に荒勾遺跡、右岸に堂堀原遺跡が位置している。五條谷支谷の西側では、大津川の河口付近には縄文時代後期の大井（船戸）貝塚（3）、大井遺跡（4）が存在し、大井遺跡とはほぼ重なるように舟戸古墳群が存在する。大井遺跡では、縄文時代後期の貝ブロックや埋設土器が検出されている^[3]。また、東山遺跡（5）、車の前遺跡（6）で調査例がある^[4]。東山遺跡は古墳時代後期の大規模な集落を中心とした遺跡であるが、奈良・彩小塙が出土したことで有名である。追花遺跡（7）は、縄文時代中期と古墳時代の集落のようである。また、荒勾遺跡に隣接する六室内遺跡（8）^[5]、天神向原遺跡（9）^[6]は奈良・平安時代中心の集落である。五條谷支谷が手賀沼低地に開口する左岸台地上には、中世小金城主高城氏の支城とされ著名な、箕輪城跡（10）が存在する^[7]。

五條谷支谷の右岸方向では、支谷開口部付近に大久保遺跡（11）が存在し、旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代早～後期の土器、奈良・平安時代の堅穴住居が検出された^[8]。当財團でも平成16年度に調査を行っており、縄文時代の堅穴住居などを検出している。大久保遺跡より南方の五条谷支谷沿いには、道堀遺跡（12）、蓮遺跡（13）があり、道堀遺跡では旧石器時代の覆層上面の遺物集中と縄文時代中期前葉・阿玉台I b式期の住居跡が検出された^[9]。

「染井入り落とし」を望む台地上では、近年大規模な土地区画整理事業に伴い、広大な面積が調査され、「湖南台遺跡群」と呼称されている。道堀原遺跡（14）^[10]、樹方遺跡（15）^[11]、岩井出口遺跡（16）^[10]などが相当する。確認調査の結果が明らかにされているが、特に縄文時代中期と古墳時代の構造密度が高いようである。樹方遺跡では、阿玉台式前半期の板状土偶が検出されており、注目される。また、松原製鉄遺跡（17）もこの区画整理事業に因縁して確認調査がおこなわれている^[12]。

また、「湖南台遺跡群」の台地下には低地遺跡の存在が示唆されており、仮称「樹方低地遺跡」（18）として注意されている^[13]。「湖南台遺跡群」の東側には、縄文時代後期・安行I式の基準的資料の出土でよく知られる岩井貝塚（19）が存在する。

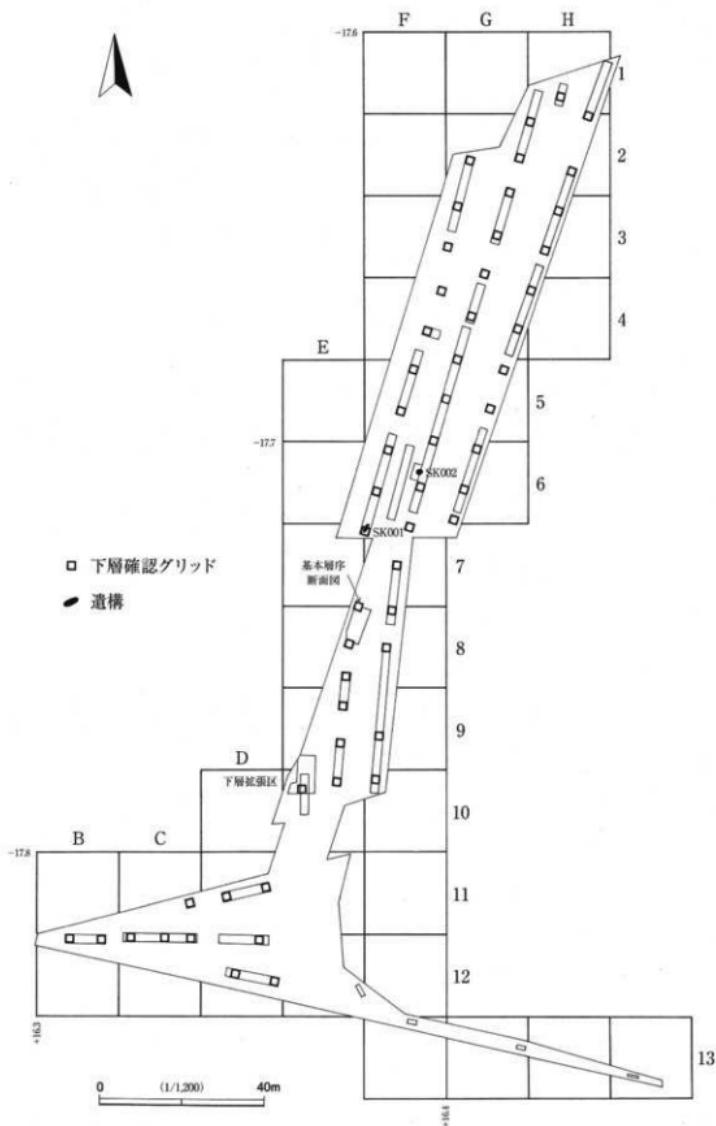
「染井入り落とし」南側では、雉子打遺跡（20）、若山毛遺跡（21）などが確認されているが、詳細は不明である。幸原遺跡（22）は断続的に調査がおこなわれており、弥生時代終末～古墳時代初頭の環濠を作った集落が存在するようであり、本報告が待たれる^[14]。「染井入り落とし」から南に貫入する支谷の奥部の遺跡としては、金山宮後原遺跡（23）が調査されている^[15]。縄文時代前期・黒浜式期の集落が中心であるが、第3号住居址ではマガキ？主体の小規模な貝層が検出されており、「染井入り落とし」最奥部の縄文時代前期貝層として注意されよう。

- 注1 沼南町教育員会 1994 「平成5年度沼南町内遺跡発掘調査報告書」
- 2 千葉県教育員会 1997 「千葉県埋蔵文化財分布地図（1）－東葛飾・印旛地区（改訂版）－」
3（大井遺跡）
沼南町教育員会 1999 「平成10年度沼南町内遺跡発掘調査報告書」
- 4（東山遺跡・車の前遺跡：遺跡名は注2文献による）
今泉 謙ほか 1987 「大井東山遺跡・大井大畑遺跡」（財）千葉県文化財センター
- 5（六蓋内遺跡）
渡辺健二ほか 1983 「沼南町文化財小報第1集 六蓋内遺跡」沼南町教育員会
- 渡辺健二 1984 「沼南町文化財小報第3集 六蓋内遺跡」沼南町教育員会
沼南町教育員会 1995 「平成6年度沼南町内遺跡発掘調査報告書」
- 6（天神向原遺跡）
渡辺健二ほか 1984 「沼南町文化財小報第2集 天神向原遺跡」沼南町教育委員会
沼南町教育員会 1992 「平成3年度沼南町内遺跡発掘調査報告書」
沼南町教育員会 1998 「平成9年度沼南町内遺跡発掘調査報告書」
- 7（箕輪城跡）
渡辺健二ほか 1987 「箕輪城」千葉県・沼南町教育員会
- 8（大久保遺跡）
沼南町教育員会 1996 「平成7年度沼南町内遺跡発掘調査報告書」
渡辺健二 2001 「平成12年度沼南町内遺跡発掘調査報告書」沼南町教育委員会
- 9（道場遺跡・雞遺跡）
田村 隆 1998 「送水管沼南～我孫子線埋蔵文化財調査報告書 沼南町道場遺跡・雞遺跡」（財）千葉県文化財センター
- 10（道場原遺跡・岩井出日遺跡）
沼南町教育員会 2000 「平成11年度沼南町内遺跡発掘調査報告書」
渡辺健二 2001 「平成12年度沼南町内遺跡発掘調査報告書」沼南町教育委員会
- 11（柳方遺跡）
沼南町教育員会 1991 「平成2年度沼南町内遺跡発掘調査報告書」
沼南町教育員会 1995 「平成6年度沼南町内遺跡発掘調査報告書」
渡辺健二・高城大輔 2002 「平成13年度沼南町内遺跡発掘調査報告書」沼南町教育委員会
- 12（松原製糞遺跡：注2文献では、「糞方遺跡」とされているが、近年の報告書にならった。）
沼南町教育員会 1991 「平成2年度沼南町内遺跡発掘調査報告書」
渡辺健二・高城大輔 2002 「平成13年度沼南町内遺跡発掘調査報告書」沼南町教育委員会
- 13（幸田原遺跡）
沼南町教育員会 1990 「平成元年度沼南町内遺跡発掘調査報告書」
沼南町教育員会 1999 「平成10年度沼南町内遺跡発掘調査報告書」
沼南町教育員会 2000 「平成11年度沼南町内遺跡発掘調査報告書」
- 14（金山後原遺跡）
宇佐見義春・風間俊人 1994 「金山宮後原遺跡」金山宮後原遺跡調査会

なお、第1章第2節1の周辺の地形については、注9文献を主に参考とさせて頂いた。



第4図 調査区位置と周辺地形図 (1/3,000)



第5図 堂堀原遺跡 確認トレンチ・遺構配置図

第2章 堂堀原遺跡

第1節 調査の概要

堂堀原遺跡の調査は、県道282号線の北側から、概ね路線幅で北の五條谷支谷に向かう調査区であった。長さ約240m、調査対象面積は6,650m²と、比較的広大である。第1章で述べたように、上層確認調査及び下層確認調査を実施し、遺構・遺物の存在した範囲を精査したが、いずれも確認調査の範囲内で調査を終了した。

第5図に、上層確認トレンチ・下層確認グリッドの位置、基本層序断面図作成位置、および検出された遺構の位置を示した。下層の旧石器時代は、調査区南寄りの地点1か所で旧石器時代石器を検出し、周囲を拡張して調査したが、礫1点を検出したにとどまった。上層の遺構は、縄文時代の陥穴状遺構と土坑を検出した。また、グリッド出土遺物として縄文時代中期中葉・阿玉台式後半の土器がやまとまって出土した。

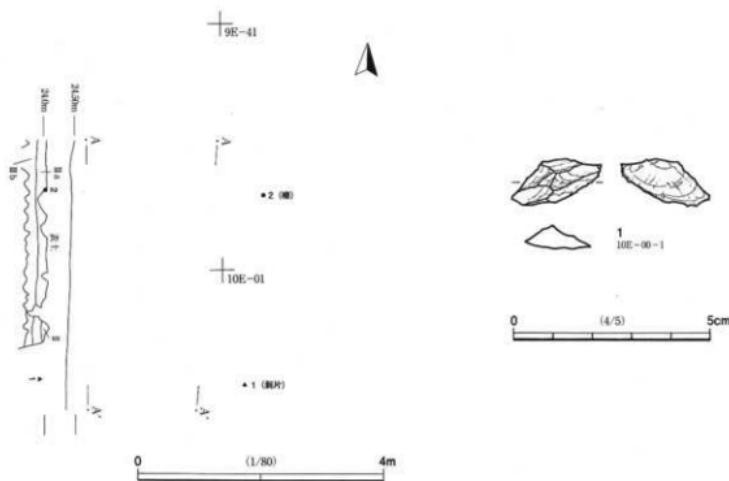
第2節 遺構と出土遺物

1 旧石器時代

分布状況（第6図 図版2）

調査区南寄りの10E-00グリッドで剥片1点、9E-41グリッドで礫1点が出土した。石器はⅢa層中で出土した。土層断面図では石器が攪乱層中に投影されてしまうが、礫が出土したⅢa層上位とほぼ同じレベルの出土である。

出土遺物（第6図 図版3）



第6図 旧石器時代遺物分布状況・出土石器

1は剥片である。石材は硬質の安山岩である。最大長12.1mm、最大幅22.9mm、最大厚6.0mmである。重量は1.20gである。小型の横長剥片で、背面は多方向からの剥離面で構成される。

2は、最大長60.5mm、重量73.09gの安山岩の円盤である。2として図版3に示した。

2 繩文時代以降

(1) 遺構

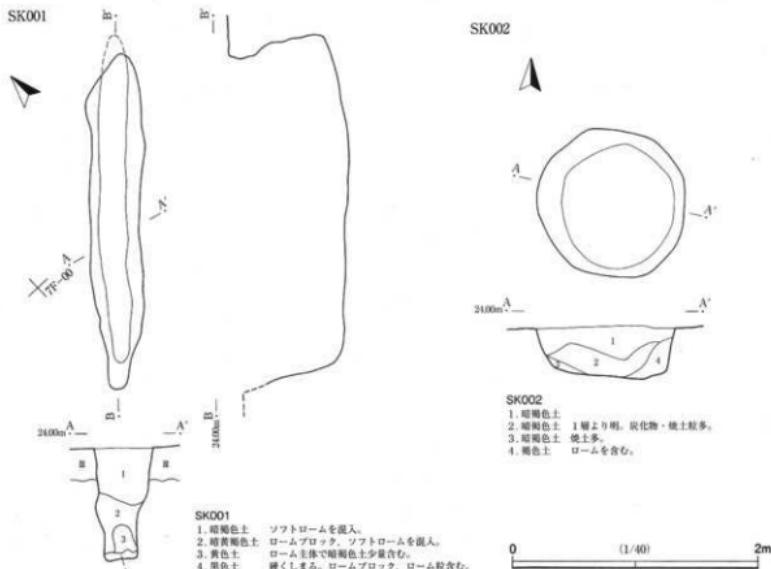
SK001 (第7図 図版2)

繩文時代の陥穴状遺構である。6F-40グリッドと7F-01グリッドにまたがって位置する。下層確認グリッドを掘り下げる過程で、遺構上面を確認した。

いわゆる溝状陥穴である。平面形は溝状の細長い形態で、短軸方向の断面形では底面に向かって狭くなり、底面はほぼ平坦である。長軸方向の断面形では、北東方向に向かってやや底面レベルが上がり、壁面はオーバーハンプする。開口部の最大長約2.7m、確認面からの深さは最深部で約1mである。

覆土は4層に分層され、覆土の大部分は色調の明るい、ローム土やロームブロックを多く含む土であるが、底面付近に硬くしまった黒色土が堆積している。

遺物は出土しなかった。



第7図 SK001・SK002

SK002(第7図 図版2)

円形の土坑である。調査時に縄文時代の可能性があると判断された。6F-13グリッドに位置する。

平面形はほぼ円形で、断面は壁がしっかりと立ち上がるタライ状である。開口部最大径は約1.3m、確認面からの深さは最深部で約44cmである。

覆土は4層に分層され、2層・3層に炭化物・焼土粒を多く含む。

遺物は出土しなかった。

(2) 確認トレンチ中出土遺物(第8図 図版3)

確認トレンチ中で出土した遺物を一括する。1~8は縄文土器である。

1・2は縄文時代中期中葉・阿玉台式後半の土器で、文様の特徴から阿玉台Ⅲ式の範疇ではないかと思う。調査区中央付近の8E-04グリッド付近でまとまって出土したものである。この他にも同一個体と思われる破片が存在するが、あまり接合せず、代表的なものを図示した。

1は概ね暗褐色から褐色を呈し、胎土中にやや大粒の白色粒を多く含む。1a・1bは、把手状の大型の波状口縁の破片で、円孔を持つ。口縁端部は肥厚した縄文帯となっており、節の大きなR L単節縄文を施す。背が高く太い、断面箱状の隆線が、円孔を巡るように渦巻き状に配され、隆線上にも縄文が施される。口縁端部の縄文帯と隆線間の一段低くなった部分には、縄文を地文として、半戦竹管の内側を用いた2列一組の押引文により文様を描く。同様の波状口縁部の破片がもう1点あり、おそらくは3単位の波状口縁となる土器であろう。

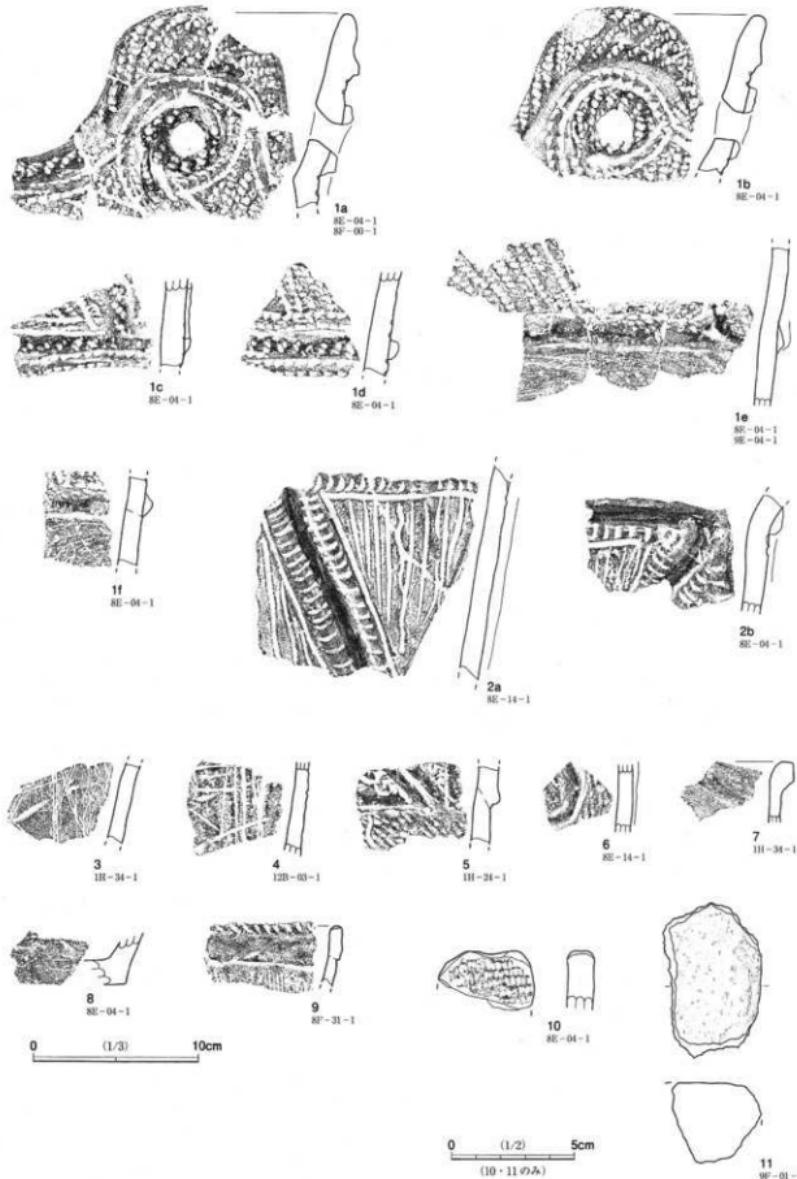
1c・1dは、この口縁部の下の部分の破片と思われる。横位の隆線が存在し、隆線上には縄文が施される。隆線の上下沿って押引文が配される。1e・1fには、おそらく口縁部文様帯下端区画であろう横位の隆線が存在する。この隆線には縄文が施されず、隆線より下は無文となる。1c・1dの横位隆線とは直接には繋がらないようで、口縁部文様帯は2段構成になる可能性があろう。

2は暗褐色で、胎土中にやや大粒の白色粒を多く含む。外面の一部に炭化物が付着する。胴部文様帯の破片であり、太い隆線で三角形に近いX画をなし、隆線沿いに間隔を空けた連続爪形文配し、さらに沈線を沿わせる。区画内には縱位の雑な沈線が充填され、その中央付近には蛇行する縱位沈線を配す。色調や焼成具合、内面の調整などが1と類似し、出土位置もほぼ同じことから、1の胴部破片である可能性があるが、確証を持つに至らなかった。

3はおそらく前期後半の浮島式系の上器で、器面に乱雜な沈線が引かれる。暗褐色から褐色で、胎土に白色粒・砂粒・赤褐色粒を含む。谷への落ち際となる調査区北端付近のIII-4グリッドで出土した。

4は、沈線が雑に引かれ、縱位沈線は一部疑似隆線状となり垂下する。円筒形に近い器形のようで、中期前葉・阿玉台式前半に伴う上器かと思う。鎌ヶ谷市西山遺跡3号住居跡出土土器¹をイメージした。暗褐色で、胎土に白色粒・砂粒・赤褐色粒を少量含むが、焼成が悪く器面が荒れている。調査区南端付近の12B-03グリッドで出土した。

5は中期中葉の、いわゆる「房総半島における勝坂式」²であろう。上器片の上部は肥厚し、この部分にいわゆる疑似隆線による区画がなされ、これに沿って、大振りな「クサビ状連続押紋」が配され、その外側にいわゆる「温泉マーク紋」に類した連続の半弧状文様が配される。肥厚した部分の下は段になつておらず、おそらくL R単節縄文による地文上に、蛇行する垂下沈線が見られる。文様の組み合わせとして、



第8図 堂堀原遺跡 確認トレンチ中出土遺物

ティピカルな勝坂式から見れば横紙破りとしか言いようがないが、こうしたあり方も房総半島における在地化した勝坂式の特徴の一と見なせよう。時期的には中期中葉末まで下る可能性があろう。褐色を呈し、胎土に砂粒・少量の黒色粒を含む。調査区北端付近のIH-31グリッド出土である。

6は中期後葉・加曾利E式で、おそらく加曾利E式の新しい部分の上器であろう。断面カマボコ状の隣線の両脇に沿って、沈線によるナゾリが施される。黄灰色を呈し、胎土に砂粒を含む。やや焼成が悪い。調査区中央付近の8E-14グリッド出土である。

7は肥厚した口縁部を持つ土器である。口縁部の肥厚帯は、比較的後がしっかりととしている。文様がないため確証がないが、晩期安行式の波状線の深鉢の可能性を考えておく。灰暗褐色で、胎土にやや大粒の白色粒を多く含む。調査区北端付近のIH-34グリッド出土である。

8は底部破片である。褐色で、胎土に白色粒をやや含む。8E-04グリッド出土で、1か2の上器の底部である可能性もある。

9は弥生時代後期の上器である。調査区内で検出した唯一の弥生上器である。複合口縁で、口唇部にはヘラ状工具によるキザミが施される。複合口縁の下には、櫛歯状工具により条線が施される。黒褐色で、胎土に白色粒と少量の雲母を含む。調査区中央付近の8E-31グリッドで出土した。

10は、上器片再利用の土器片錐である。全体の1/3程度が残存しており、上器片の周囲は若干研磨される。糸掛け用の切り込みは幅広く取られているが、中央部は糸が当たったせいか、擦れた痕跡が顕著である。最大長は残存値で24.0mm、最大幅38.5mm、最大厚10.5mm、重量は10.15gである。調査区中央付近の8E-04グリッドで出土した。

11はいわゆる円錐製加工具の破片である。計測値はすべて残存値であるが、最大長63.0mm、最大幅40.0mm、最大厚34.1mm、重量は71.88gである。

注1 犬塚俊雄 1982 「第四章第二節（2）西山遺跡」『鎌ヶ谷市史』上巻 鎌ヶ谷市史編さん委員会

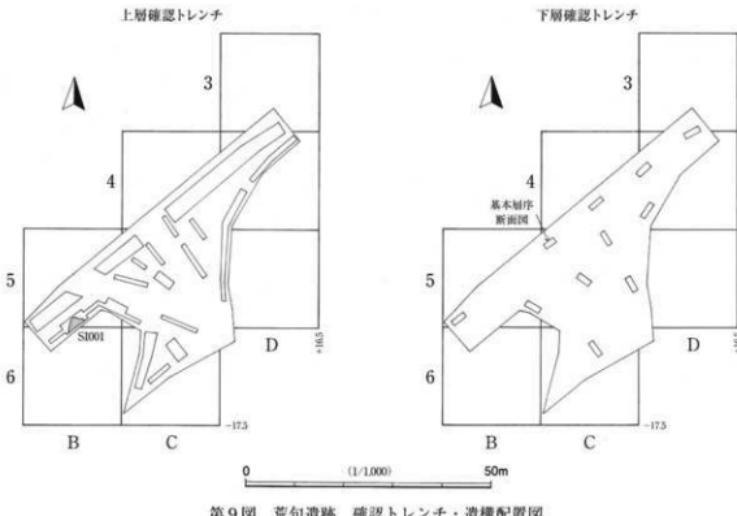
2 下総考古学研究会 2004 「〈特集〉房総半島における勝坂式土器の研究」『下総考古学』18

第3章 荒句遺跡

第1節 調査の概要

荒句遺跡の調査は、県道8号線（船橋我孫子線）に接する調査区であった。調査対象範囲は1,190mである。上層確認調査及び下層確認調査を実施し、遺構・遺物の存在した範囲を精査したが、いずれも確認調査の範囲内で調査を終了した。上層確認調査では、耕作による擾乱が予想以上に激しく、本来存在したはずの遺構がすでに破壊されていた可能性もある。

第9図に、上層確認トレンチ・下層確認トレンチの位置、基本層序断面図作成位置、および検出された遺構の位置を示した。上層遺構として奈良・平安時代と考え得る竪穴住居跡を1軒検出した。下層の旧石器時代遺物は確認できなかった。



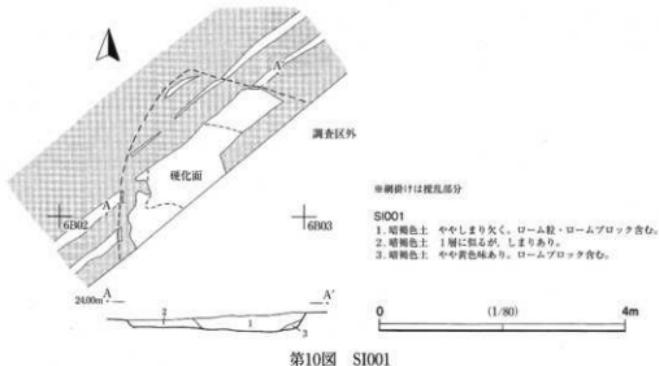
第9図 荒句遺跡 確認トレンチ・遺構配置図

第2節 遺構と出土遺物

1 遺構

SI001 (第10図 図版2)

出土遺物から、奈良・平安時代の竪穴住居跡と考えられる。調査区西端部の5B-41グリッドで検出された。調査区際の確認トレンチで検出されたため、南側の大部分は調査範囲外に伸び、全体の1/4程度を検出したと考え得る。太い溝状の耕作痕によって、地山の大部分が擾乱されており、床面の一部が残存していた。擾乱のない部分でかろうじて壁が検出できたことから、平面プランを何とか推測することができた。



第10図 SI001

推定される平面プランから、検出したのは住居跡の北西隅と考えられる。カマドは検出されなかった。残存した床面には、硬化面が認められた。検出できた範囲での南北軸の最大長は約3mで、確認面からの深さは最深部で28cmである。

覆土は3層に分層されたが、覆土の大部分がロームブロック含む暗褐色土で、人為的な埋土の可能性があろう。出土遺物は、土師器の細片が数点出土したが、図示し得なかった。第11図5の須恵器杯が、おそらく隣接するグリッドから出土したもので、この住居跡との関連が窺える。また、第11図4の縄文土器が1点出土したが、混入であろう。

2 確認トレンチ中出土遺物（第11図 図版3）

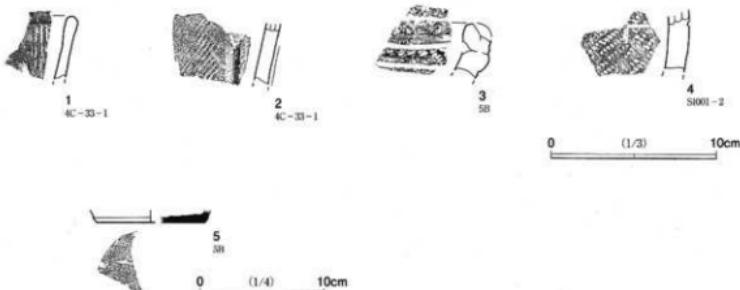
1～4は縄文土器である。1は早期前葉・稻荷台式である。口縁部が若干肥厚し、撚糸文を継位に施す。観察しづらいが、撚糸文はおそらくR撚糸文で、間隔を空けて施されるようである。灰暗褐色で、胎土に白色粒・砂粒を含む。2は中期後葉・加曾利E式で、加納実が定義するところの加曾利EⅣ式であろう⁽¹⁾。いわゆる微隆線に近い継位の隆線を持ち、隆線の両側にナゾリが施されるが、隆線上に一部縄文が残っている。隆線の断面形は三角形に近い。暗褐色で、胎土に白色粒をやや含む。1・2はともに調査区北側の4C-33グリッドで出土した。

3は後期初頭のいわゆる称名寺I式である。遺存状態が悪いものの口縁部破片で、口縁部断面は若干内折気味になる。2条の横位沈線間に縄文が施される。黒褐色～暗褐色で、胎土に白色粒を含む。5Bグリッド出土である。4は後期前葉・堀之内1式であろう。地文縄文上に引かれた沈線の一部が残る。明るい暗褐色で、胎土に少量の白色粒・赤褐色粒を含む。SI001から出土したものである。

5は須恵器杯の底部破片である。推定底径8.8cmで、底部の調整は手持ちヘラケズリによる。内面はクロナデの痕跡が顕著である。灰色で、胎土中に白色粒をやや含む。5Bグリッド出土である。

注1 加納 実 1989 「小中台（2）遺跡・新堀込遺跡・馬場遺跡」（財）千葉県文化財センター

1989 「千葉県における加曾利E式後半の様相」『縄文中期の諸問題』群馬県考古学研究所



第11図 荒句遺跡 確認トレンチ中出土遺物

第4章 ま　と　め

本報告書では、柏市の旧沼南町域に所在する、堂堀原遺跡と荒句遺跡という2か所の遺跡の調査成果を所収した。両遺跡とも、平成5年度に沼南町教育委員会によって、各1度の発掘調査がおこなわれている⁽¹⁾。この成果に加え、今回の調査は両遺跡の情報にさらに厚みを持たせるものとなった。

堂堀原遺跡の沼南町教育委員会による平成5年度の調査は、今回の調査区の南西端部にほぼ隣接する地点（調査区南西端の三叉路の西側）、3,000m²が調査区であった。この調査区では、遺構は検出されなかつたものの、縄文時代中期後半の土器が出土した。

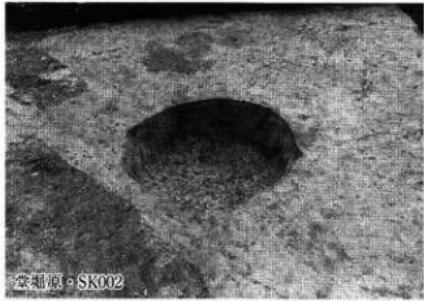
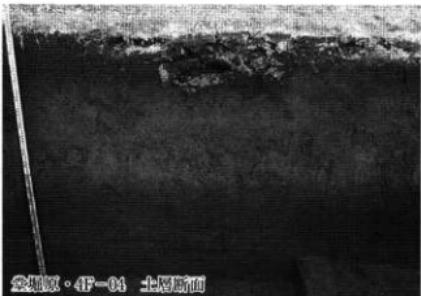
今回の調査では、旧石器時代・縄文時代・弥生時代の遺構・遺物が出土した。旧石器時代では、Ⅲ層中から剥片1点と環1点が出土した。縄文時代では、遺構として溝状の陥穴状遺構1基、土坑1基が検出された。遺物は、中期中葉・阿玉台式後半の土器がやまとまって出土し、その他少數ながら、前期・中期及び晩期の可能性が考えられる土器が出土した。また、1点のみではあるが弥生時代後期の土器が出土し、今回の調査により断片的ながらも、堂堀原遺跡の遺跡としての時代幅が広がったと評価できよう。遺跡の一つのトピックは、おそらく縄文時代中期にあることが想像される。

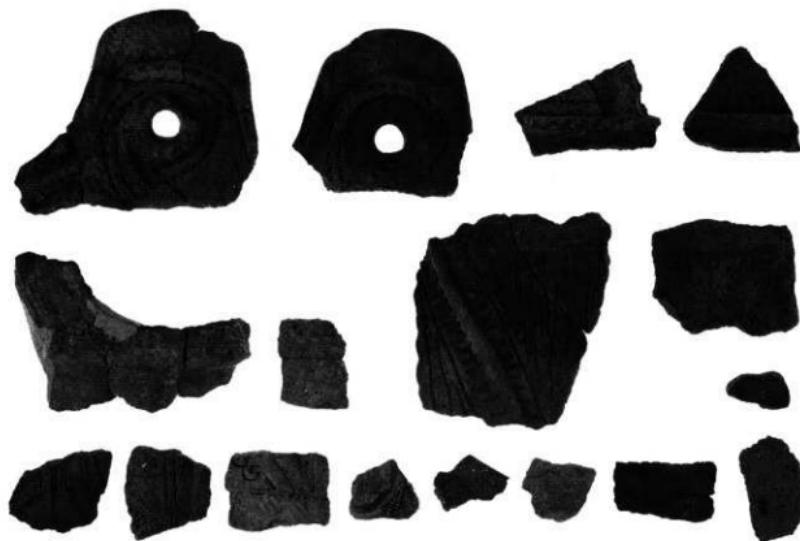
荒句遺跡の沼南町教育委員会による平成5年度の調査は、今回の調査区から県道船橋・我孫子線を挟んだ西側の地点、約1,600m²が調査区であった。この調査区では、奈良・平安時代の竪穴住居跡が1軒検出され、土師器・須恵器とともに鉄製の刀子が出土した。

今回の調査区でも、奈良・平安時代であろう竪穴住居跡の一部が検出され、荒句遺跡が奈良・平安時代の集落として広がりを持つことが明らかとなった。また、少量ながら縄文時代早期・中期・後期の土器が出土し、特に早期・撫糸文土器の出土は注意されよう。

注1 沼南町教育委員会 1994 『沼南町内遺跡発掘調査報告書』







堂堀原遺跡・確認トレンチ中出土遺物（1/3）



堂堀原遺跡・旧石器1（1/1）



堂堀原遺跡・旧石器2（4/5）



荒句遺跡・出土遺物（1/2）

報告書抄録

ふりがな	かしわしどうほりはらいせき・あらくいせき							
書名	柏市堂堀原遺跡・荒句遺跡							
副書名	県単道路改良（幹線道路網整備）委託（大島田埋蔵文化財調査）報告書							
卷次								
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第561集							
編著者名	大内千年							
編集機関	財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター TEL043-424-4848							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2							
発行年月日	西暦2006年11月30日							
所収遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
堂堀原	柏市大井字堂堀原 1897-9ほか	12305 011	35度 50分 25秒 日本測地系による	140度 0分 54秒	20031201～ 20040204	6,650	県単道路改良（幹線道路網整備）に伴う埋蔵文化財調査	
荒句	柏市五條谷字上谷 ツ台39-7ほか	12305 012	35度 50分 33秒 日本測地系による	140度 0分 58秒	20040203～ 20040226	1,190		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
堂堀原	包蔵地 集落跡	旧石器時代		剥片	縄文時代中期・阿玉台式後半の土器が出士			
		縄文時代	竪穴状遺構 土坑	1基 1基				縄文土器（前期・中期・晚期）、石器
		弥生時代						弥生土器（後期）
荒句	集落跡	縄文時代		縄文土器（早期・中期・後期）				
		奈良・平安時代	竪穴住居跡1軒	須恵器				

千葉県教育振興財団調査報告第561集

柏市堂堀原遺跡・荒句遺跡

—県単道路改良（幹線道路網整備）委託（大島田埋蔵文化財調査）報告書—

平成18年11月30日発行

編 集 財團法人 千葉県教育振興財団
文化財センター

發 行 千葉県県土整備部
千葉市中央区市場町1番地の1
財團法人 千葉県教育振興財団
千葉県四街道市庵渡809番地の2

印 刷 株式会社 正文社
千葉市中央区都町1丁目10番6号
